

IV 「遼墓出土契丹陶磁に見られる契丹国（遼朝） 社会の階層性について」

町田 吉隆

1. はじめに

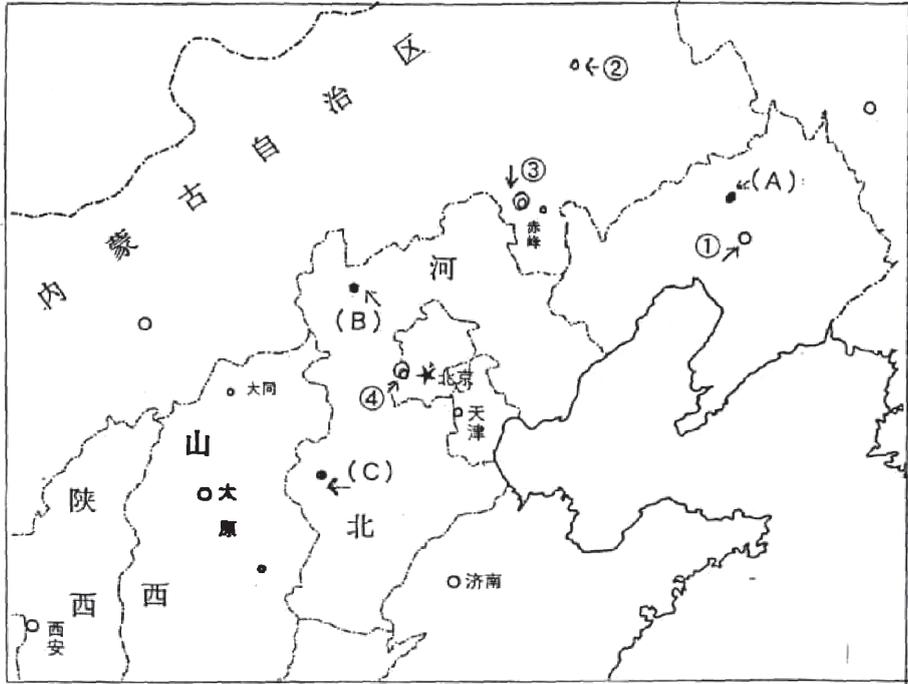
契丹国（遼朝）の遺跡からは同時代の北宋においては見られない器形、様式の陶磁器が出土する。これら契丹国（遼朝）の国内で生産されたと考えられる陶磁器を「契丹陶磁」と呼ぶことで、契丹国（遼朝）の遺跡から同時に出土する北宋からの輸入陶磁器と区別することを報告者はかつて提唱した（2008町田吉隆）。しかしながら、しばしば現地の遺跡や博物館など文物保存機関を訪問する際、特徴的な器形、すぐれた造形や様式の変遷など、個々の陶磁器を追うばかりで、出土した陶磁器を群としてとらえ、全体像を見通すまでには至らないという課題を抱えてきた。

Hsingyuan Tsao（曹星原）女史は河北省の2つの壁画墓、北宋治下の白沙宋墓と契丹国（遼朝）治下の宣化遼墓が共に11世紀後半の地上での生活を反映していることに着目して、両者を比較し、2つの国に分かれて1世紀半で両者の間に異なる生活文化が形成されたことを指摘した（2000 Hsingyuan Tsao）。壁画や副葬品を含め、葬墓全体をグロスで捉える視点は説得的であり、結論も興味深い。

報告者は、科学研究振興費・基盤（C）「デジタルアーカイブ技術による契丹国の歴史考古言語資料の復原的研究と集成」に参加した際に、遼寧省の葉茂台遼墓について考究する機会があった。それらの知見も含め、葬墓に副葬された陶磁器の視点から「契丹陶磁」の特色について検討を進める。

2. 葉茂台遼墓出土の陶磁器

葉茂台遼墓は遼寧省瀋陽市法庫県の西部、葉茂台鎮で発見、調査された。西の彰武県、南の新民市との境界に近く、現在は高速道路が鎮の北部を通るが、鎮の西部丘陵地帯に分布している。1953年に1基が発見され、1973年に合計6基の発掘調査が行われ、その後、1974年に7号墓が発掘された（1975遼寧省博物



PL.1 関連地域の略地図

- (A) 葉茂台遼墓 (B) 宣化遼墓 (C) 宣化遼墓 ① 瀋陽(現遼寧省省都)
 ② 巴林左旗(遼上京址) ③ 赤峰・缸瓦窯址 ④ 北京・龍泉務窯址

館)。

葉茂台遼墓からは墓誌が出土しなかったため、被葬者は特定されていない。調査を主導した馮永謙氏は周辺の遼代州県城に着目して、葉茂台の西南約20 kmの二台子村城址に「渭州」が、東北約20 kmの南土城子城址に「原州」が、西北約35 kmの彰武県土城子城址に「横州」が比定されることに基づいて、これらの州県城に投下されていた契丹国(遼朝)で皇族に準じた地位にあった蕭氏一族が葬られた墓群ではないかと推測している(1994馮永謙A)。出土した陶磁器の多くは瀋陽市の遼寧省博物館などで見ることができる。

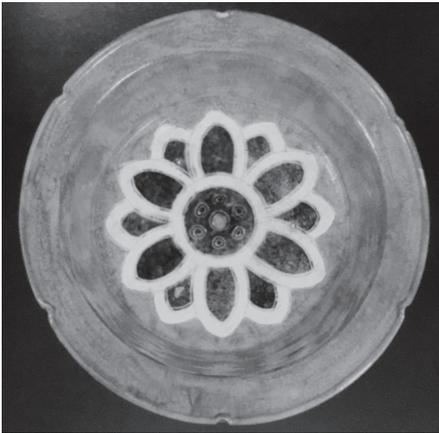
馮永謙氏は当時確認された陶磁器36点を河北省の定窯系白釉磁器5点、江西省景德鎮窯の青白釉(影青)磁器2点、寧夏回族自治区銅川市の耀州窯青磁3点、陶磁器窯は確定できないが、北方系青磁として9点をあげている(1994馮永謙B)。ただし、この9点の青磁については、今日的に見れば、蓮弁文を碗外側および



PL.2 葉茂台遼墓址（東より西を望む 2013報告者撮影）

内側碗底にほどこす小碗などは浙江省の越窯系青磁に分類すべきとも考えられる。

一方、約半数の17点が「契丹陶磁」として分類される。鉄釉を施した黒褐色の鶏冠壺、蓋付き長頸壺、鶏腿瓶、梅瓶（口縁部をしぼった壺）、白化粧土を施した上に白釉をかけた白釉磁器の碗、盤口長頸瓶などである。北宋時代の磁州窯や耀州窯でも行われた胎土を深彫りした白釉磁器の長頸瓶は胎土の鉄赤色と白釉でコントラストを作る技法を用いており、「契丹陶磁」が当時の華北陶磁器窯と技術的には共通する部分を有していたことがわかる。馮永謙氏はこれらの陶磁器を焼成した陶磁器窯として、内蒙古自治区赤峰市松山区の缸瓦窯や遼寧省遼陽市の江官屯窯を想定しており、契丹国（遼朝）時代に移住した漢人陶工による技術移入があったとしている。「契丹陶磁」がどこで生産されていたかについては各器形、技法により異なっていたと考えられ、その比定は難しい部分もあるが、馮永謙氏の分類で注目されることは葉茂台遼墓では約半数の副葬陶磁器が北宋からの輸入陶磁器であった点である。



PL. 3 (左上)

黒釉鶏冠壺、葉茂台7号墓出土（遼寧省博物館、2011年報告者撮影）

PL. 4 (右上)

黄釉瓜形壺、宣化遼墓7号墓出土（『宣化遼墓』2001、彩版 p. 37より転載）

PL. 5 (左下)

三彩花式口洗、宣化遼墓7号墓出土（『宣化遼墓』2001、彩版 p. 37より転載）

PL. 6 (右下)

越州窯系青磁碗、葉茂台7号墓出土（遼寧省博物館、2011年報告者撮影）

葉茂台遼墓が蕭氏一族の墓群と推定されることは先に述べたが、同じような傾向は内蒙古自治区奈曼旗において発掘調査された陳国公主と附馬合葬墓でも見られる。同墓は開泰7年(1018年)の墓誌が出土している。定窯系白釉磁器11点、越窯系青磁4点、耀州窯青磁8点に対し、「契丹陶磁」として分類できる副葬陶磁器は白釉磁器2点、鉄釉の鶏腿瓶3点、遼三彩と同じく銅を呈色剤とする低火度鉛釉を用いた緑釉陶磁器が2点であり、30点のうち、輸入陶磁器が約4分の3を占める(1993内蒙古自治区文物考古研究所)。葉茂台遼墓1号、6号墓は出土遺物が少なく、発掘調査以前に盗掘されていた可能性があり、当初に埋納されていた副葬陶磁器の数量はわからない。「被葬者が高位の人物であれば、輸入陶磁器が副葬される比率が高い」と仮定するならば、輸入陶磁器は盗掘当時の流通価格も高額であったと推測されることから、被害を受けた葉茂台遼墓には当初、より多くの輸入陶磁器が副葬されていた可能性もあるだろう。

3. 宣化遼墓出土の陶磁器

保存状態の良い壁画で名高い宣化遼墓は河北省北部の張家口市宣化県の中心から西約3kmの下八里村にある。現在は工業都市になっている宣化県は県城の南に洋河が東流する平坦な地形である。墓主は張匡正(984-1058年)に始まる張氏一族と4号墓の墓主・韓師訓(1042-1110年)である。いずれも契丹国(遼朝)時代において宣化の漢人有力者であった。1号墓の墓主・張世卿(1042-1116年)は張匡正の孫に当たる。その張世卿の孫である張伸の妻は耶律氏であり、契丹人貴族とも11世紀末には婚姻関係を結ぶ勢力であったことが墓誌から判明している(2001河北省文物研究所、2004劉濤、2008劉海文)。

以下に副葬陶磁器の状況を見てみると、10号墓の墓主は張匡正、清寧4年(1058年)の墓誌、大安9年(1093年)に改葬。白釉磁器14点、鉄を呈色剤とする低火度鉛釉を用いた黄釉陶磁器5点、緑釉陶磁器1点、遼三彩1点ですべて「契丹陶磁」であった。7号墓の墓主は匡正の子、張文藻、大安9年(1093年)の墓誌、定窯系白釉磁器の盆1点、他は白釉磁器24点、黄釉陶磁器5点、緑釉陶磁器2点、遼三彩1点。5号墓の墓主は文藻の子、張世古、乾統8年(1108年)の墓誌があるが、副葬されていたのは無釉の陶器32点で、釉薬を施した陶磁器は1点も無い。世古と同じく匡正の孫にあたる1号墓の張世卿の墓誌は天慶6年(1116年)、景德鎮窯青白磁器の碗托1点、越窯系の注壺1点に対し、鉄

釉を用いた黒褐色の鶏腿瓶3点。黄釉陶磁器5点、遼三彩1点の「契丹陶磁」が副葬されていた。2号墓墓主の張恭誘は世古の子であるが、白釉磁器19点、鉄釉と緑釉の鶏腿瓶が各々1点で、輸入陶磁器の副葬品は1点も無かった。天慶元年(1111年)に葬られた韓師訓の4号墓には黄釉陶磁器の唾壺1点、碗の残片、蓮弁文を施した白釉磁器碗の残片が残されていた。4号墓のように盗掘を受けたと思われる例もあり、墓群が形成された11世紀半ばから12世紀初めの埋葬状況が、そのまま残っているわけではないが、葉茂台遼墓の副葬陶磁器とは様相を大きく異にしていたことは明瞭である。

4. 「契丹陶磁」の階級性

契丹国(遼朝)において、定窯の白釉磁器、越窯系や耀州窯の青磁、景德鎮窯の青白磁器が高級品として認識されていた。それは貴族趣味とも捉えられるが、そこには民族的な違いはなかったようである。聖宗に仕えた武将、耿延毅の夫婦合葬墓は開泰9年(1020年)の墓誌を持つ。副葬された陶磁器のうち、定窯系白釉磁器10点、青白磁器7点、耀州窯青磁6点の輸入陶磁器に対し、白釉磁器5点、緑釉陶磁器の鶏冠壺2点が「契丹陶磁」に相当する(2004劉濤)。副葬陶磁器の構成に契丹人貴族と漢人高級軍人の間に差は認められない。高価な輸入陶磁器を入手できた者はそれを副葬し、購入できなかった者は国内で作られた「契丹陶磁」でそれに代えたとも言えよう。

一方、「契丹陶磁」の典型例、遊牧民の生活を反映させた契丹文化独特の器形とされる鶏腿瓶や鶏冠壺は契丹人であるか否かにかかわらず、好んで副葬品に加えられたようである。Tsao 女史が指摘したように契丹国(遼朝)の領域では建国1世紀を経た10世紀末には独自の文化が死後の世界でも確立していたと言える(2000 Hsingyuan Tsao, p. 19)。むしろ、契丹人貴族の中に北宋からの輸入陶磁器を尊ぶ風潮が長く続き、漢人有力者の中に「契丹陶磁」に対する嗜好が定着していた。

ただし、これを宣化遼墓の被葬者であった漢人有力者が「契丹化 Qidanization」したと見る Tsao 女史の見解には一定の留保が必要と思われる(2000 Hsingyuan Tsao, pp. 15-17)。というのは、被統治者が地域で有力であり続けるために、支配者の嗜好に接近していく現象、たとえば、近代イングランドにおいてジェントルマンが貴族の生活スタイルをまね、産業革命の過程で産業資本家が成功する

と地方に所領を求めて、ジェントルマン的な生活を好むような事例は知られているが、宣化遼墓の被葬者である張氏一族が耶律氏と婚姻を結ぶようになる11世紀末の段階でも支配者である契丹人貴族と漢人有力者の間には副葬陶磁器の組成に相違が見られるからである。蕭袍魯は『遼史』巻24道宗本紀に、北府宰相と記される蕭袍里に比定される人物であるが、大安9年(1090年)の墓誌を持つ墓が葉茂台遼墓がある法庫県東部で発見されている(1994馮永謙C、2004劉濤)。同墓からは河北省の定窯系白釉磁器4点、江西省景德鎮窯の青白磁器4点に対し、「契丹陶磁」と見なされる陶磁器は把手付き注壺と盒の白釉磁器各1点である。

つまり、有力な被支配者は「契丹化 Qidanization」したかもしれないが、支配階級であった契丹人貴族の輸入陶磁器への嗜好が弱まったとは思われない。契丹国(遼朝)内部には副葬陶磁器を指標にできる階級性が根強く存在していたと言えよう。むしろ、陶磁器への嗜好に関して言えば、北宋の支配階級となった科挙官僚層と契丹国(遼朝)の契丹人貴族の間に約150年間にわたり、共通する嗜好があったと考えられる。

5. むすびにかえて

今日、我々が中国や日本を含む世界各地の博物館、美術館に所蔵されている「契丹陶磁」の伝世品の大部分が、遼墓に収められた副葬陶磁器であったと思われる。年代や出土地がわからなくなっている伝世品の数は相当数に及ぶ。たとえば、白化粧土を施した胎土に白黄釉や緑釉で幾何学文や草花文を黄釉や緑釉を用いて描いた盆など焼成していた陶磁器窯も不明な器形や様式も存在している。これらの陶磁器がどのように使われていたのかを知るためには、陶磁器窯を特定すると共に、都城など生活遺跡の調査を欠くことができないが、そのような調査が難しい状況では遼墓出土品が有力な手がかりであることは間違いない。Tsao 女史が試みた北宋と契丹国(遼朝)の同時代の壁画墓を比較する手法は、文化、生活面でも10世紀初めから12世紀初めにかけて、2つの異なる文化を持つ国家が存在していたことを明らかにした。その一方で契丹国(遼朝)においては契丹人貴族が北宋の支配階級となった科挙官僚、士大夫と同じ美意識で輸入陶磁器を愛したのに対し、漢人有力者の中に「契丹陶磁」を副葬する陶磁器として選ぶ嗜好が存在していた。単に貴族が北宋の文化にあこがれ、被支

配者が「契丹化 Qidanization」したという説明では片付けられない階層が生まれていたと考えられる。

今後の課題として、11世紀後半に現れる最も「契丹陶磁」らしい遼三彩がどのように生まれ、人々に受容されたのか、地域による差があったのかどうかという視点に基づいて検討を進めることで「契丹化 Qidanization」とは何かを考える必要があるだろう。

【参考文献】

- 遼寧省博物館、遼寧鉄嶺地区文物組「法庫葉茂台遼墓紀略」『文物』1975年12期、pp. 26-36
- 内蒙古自治区文物考古研究所、哲里木盟博物館『遼陳国公主墓』文物出版社 1993
- 馮永謙A「法庫葉茂台遼墓」『東北考古研究（一）』中州古籍出版社 1994
- 馮永謙B「葉茂台遼墓出土的陶磁器」『東北考古研究（一）』中州古籍出版社 1994（原載『文物』1975年12期、pp. 26-36）
- 馮永謙C「遼寧法庫前山蕭袍魯墓」『東北考古研究（一）』中州古籍出版社 1994
- Hsingyuan Tsao“Differences Preserved-Reconstructed Tombs from the Liao and Song Dynasties”Douglas F. Cooley Memorial Art Gallery 2000
- 劉濤『宋遼金紀年瓷器』文物出版社 2004
- 劉海文主編『宣化下八里Ⅱ区遼壁画墓考古發掘報告』文物出版社 2008
- 河北省文物研究所『宣化遼墓』文物出版社 2001
- 町田吉隆「内蒙古自治区通遼・赤峰両市管内の博物館施設における契丹陶磁資料」『契丹陶磁—遼代陶磁の資料と研究—』朋友書店 2008、pp. 12-22